

## 基調講演「命の教育のための学校飼育のあり方」

無藤 隆



本論文では、学校での実践に基づきつつ、学校での動物飼育の基本を述べつつ、それを「命の教育」につなげるにはどこに配慮すべきかを論じる。

### 1 学校における動物飼育の実践の構築

子どもからの様々な関わり方が必要である。単に動物を眺めるだけでは子どもにとって身近なものにならないし、詳細に見ようとの気持ちが起きてこない。教師が主導して何を見るかを指示すれば観察は可能であろうが、それだけなら、何も実物に関わるまでもない。子どもの側から能動的に関わるようになる。その関わり方は通常の動物へのものと同様であろう。可愛がること、世話をすること、観察することなどである。それが幼児や小学生に難しいとためらわなくてよい。教師が指導し、また上級生と一緒にする中で自然に覚えていく。むしろ、動物への最小限の関わり方は始めにきちんと指導しておくことが大事である。こういった愛玩、世話、観察などの活動を組み合わせるやり方は、どれか一つというよりも、関係が多様になり、動物の生態に気づきやすくなる。

こういった意味では従来の理科でやっているような動物の観察と飼育とは区別すべきであろう。観察には科学的な意義があるが、その前に十分に様々な動物への関わりが必要である。子どもの側からしても、触ったことのない動物についてそれを見るだけで詳細な観察をせよと言われても、実感が湧かないだけでなく、どうでもよいことを見ているだけの感じられるだろうし、そもそもなぜある特定のポイントを見出さねばならないかが分からない。ウサギなら触り抱くことで、温血動物としての特徴がつかめるし、赤ちゃんを世話することで哺乳類であることが実感できる。元気のあるときとないときの様子の区別もついて、動物にとっての食べること飲むことの大切さにも気づく。

愛着のある個別的関係を作っていく。その対象が好きだという気持ちになれるようになる。そのためには、同類の他の個体と区別でき、かつ出来れば相手の動物がこちらからの関わりに個別的に応じてくれるといい。犬などのペットは飼い主を覚えてこの目的に適するように見えるが、犬は飼い主の世話を応じるだけでなく、他の人からの世話を嫌がる傾向がある。このように多くの人による世話を嫌がったり、特定の人との愛着が強く、その人がいないと元気でやれないようだと、学校では扱いにくい。だが、最小限、個別的な関係を持っていると子どもの側が感じられる程度のことが成り立ってほしい。つまりは、どの動物の名前を付けられるような個体としての関わりが子ども側から成り立つ必要がある。そのように出会ってこそ、愛情もわくし、継続的に関わる氣にもなる。冷静に観察し、認識を進めるということはあるいは上の年齢では可能かもしれないが、幼児・小学生ではとりわけ、喜び、悲しみ、驚きといった感情が喚起されることで関係は深まる。

また、その根本には相手となる動物との応答的関係が成り立つことがあるだろう。餌を持って行くとよってくるという程度から、愛玩するとそれに応じて喜んでいるように見えたり、さらに求めたりする。また、広い庭に出すと喜んで走り回る。でも、こちらが声を掛けると、そばに寄ってくる。これから生まれる感情がさらに動物の表情や仕草の愛らしさなどで強化されていく。

名前を付け、特定の個別的関係が成り立つことが子どもにとって理解を深化させる動機となる。他の個体と区別されるその個体の特徴に关心が向かう。逆説的だが、そのことがかえって、動物の種類全般に共通する特性を浮き彫りにしやすくなる。ウサギは個体により多少は食べ物の好みは異なるかも知れないが、でも、大体は同じものを好むと分かる。飛び跳ね方に少し違いがあつても、要するに飛び跳ねることは共通である。

愛着を抱くとは、常にその動物への关心が維持されるということでもある。いくら世話をしても、その当番のときに关心を持つが、それが済めば、後は忘れているようだと、教育効果が薄くなる。さらに、日頃の動物の様子を見ることがないので、知識が広がらない。土日や長期休業中の世話を進んでするといった積極性が養われない。つまり愛着があつて初めて、その動物を死なせたくないとか、苦しめたくないと思い、どうしたら快適に暮らせるように出来るだろうかという配慮も生まれる。そうなると、日頃から世話を心がけるだけでなく、その動物の様子をいつも見ていき、快適かどうか、元気かどうかをとらえつつ、どうすれば

そうできるかを考え、そのための手がかりを探し、その結果、動物の特徴について詳しくなっていくに違いない。

さらに、単にその動物の様子が分かるだけでなく、その生態のあり方について理解を深めていくべきではないだろうか。生態に関わる体験から気づきへの経路を作るのである。単に動物に関わるだけでなく、その動物の習性やどのような場で暮らすのかまで理解できるように、住まいや餌などについても世話をし、やり方を把握する。そこから、動物とその生態的な場とが切り離せない関係のあることに気づいていく。動物自体の顔つき・体つきまたどのようなものを食べるかなどは通常の関わりで分かっていくものだが、どのような場で暮らすのがその動物にとって好ましいのかに気づけるようにするには、世話をする体験やまたその際の住み処に対して子どもの関心を向けていくのである。

例えば、ザリガニを飼うとする。どのような住み処にすればよいだろうか。子どもが池でザリガニを釣ってきて、飼いたいと言うとき、初めはまるで人間の家のように、水槽に「おうち」を作るかも知れない。その内、それは変だと気がつき、ザリガニのいた池に戻り、その状況を見習って、水槽に再現してはどうかと言いく出る。必ずしも澄んだ水がよいのではないとも分かる。

ウサギなどだと野生の状態を観察できるわけではない。図鑑で調べたり、専門家に尋ねたりすることで、生態の特徴を知ることが出来るだろう。同時に、野生の状況を復元することがベストなのではなく、世話しやすい状態でかつその動物にも快適であることの工夫がいる。それは専門家による指導が望まれる。そうであっても、飼う中で動物の生態に注意を向けるように指導していくだろう。このように、一つの動物への関心・感性が開かれれば、それは他の生き物にも広がっていく。

## 2 飼育の効果について実証のポイント

動物についての気づき、生命への気づき・感性、さらに思いやり等が検討出来よう。その順で確認していくべきであろう。動物飼育の効果があるとしたら、まず動物への関わり方が広がり、適切になっていくはずである。それを抜きにいきなりお思いやりとか命についての学びと言っても意味がない。それは観察によりとらえることが出来よう。それとともに、質問紙やインタビューにより、その動物の特性について分かっているかどうかを尋ねることが出来る。

まず、子どもの扱い方がその飼育している動物にふさわしいか。人形やおもちゃのような扱いかから脱していくか。その動物固有の扱い方をするようになるか。動物固有の様子に気づくか。観察力を伸ばすということである。その動物の独自の習性が分かるだろうか。



ある幼稚園で子どもがハムスターを可愛がっていた様子を見たことがある。誰かがその子どもを呼んだら、その子はハムスターをものを置き捨てるよう床に放り出して、駆けていった。見ていた私はその当たり前の「捨て方」にショックを受けたのである。幸い、ハムスターが怪我をしたわけではないが、でも、例えば、手のひらで支えつつ、そっと小屋に戻すとか、誰かに託すといった行動ではなかった。その前の可愛がっていた様子と対比的で驚きを感じた。ただ、確かに赤ちゃんに対するようなそのかわいがり方はごっこ遊びで赤ちゃん人形を使うのと大して代わりがないのかも知れない。ハムスターがどうすれば喜ぶのかという配慮が見られていたわけではなかった。

気づきについても、正面切って尋ねれば、ものとしてとらえているわけではないだろう。生きていることは分かっているに違いない。ただ、例えば、水をほしがっているらしいとか、おなかが空いているとか、そういうった様子が分かるかどうか。また知識として、例えば、ウサギの糞には2種類あるとか、片方はウサギは再度食べることがあるとか、そのにおいが人間（つまり肉食動物）とは異なることが分かっているかどうか。その一つをきちんと把握していることが重要なのではない。個別の知識はたまたまそういった場面に出会うかどうかで変わってくる。むしろ、その子どもになりに動物の特性の何かに気づくことが大事なのであろう。

動物や生き物への感性・感覚の広がりが成り立つか。その生き物としての特徴に敏感になり、存在に気づき、関心を持ち、大事にしようとするか。きれいなまた可愛いものだけでなく、幅広く関わっていこうとするか。

知識といった明瞭な自覚的な把握ではないが、しかし、まわりのもののあり方を感じ取ることを感性と呼べるのだろう。そういうたった感覚を基礎としてまわりのものの多様なあり方を感じ取れることが、おそらく、体験から気づきに進み、さらに知識として成り立つだけでなく、実際の思いやりなどの行動につながる基礎にある。まわりを見回

したときに、そういう感性が育っていれば、すぐに生きているものが目にはいるだろう。そして、その様子に気がつく。思いやりの元は「配慮すること」であり、配慮のさらに基盤は「感性のレベルでまわりが目に入ってくる」ことである。

動物が弱っているとしよう。その様子が普段と異なることが自ずと気がつかれる。おや変だと思う。そばに寄る。まじまじと見直してみる。日頃の様子を思い浮かべる。何か忘れていることはないか。小屋の状態をチェックする。何かやれることはないだろうか。よく分からなければ、友だちや上級生や先生を呼んでもよい。

動物を眺めて楽しんだり、抱いてうっとりしたりもするだろう。素敵だと思ったら、いい気持ちと思う。可愛いと感じる。型どおりの可愛さを感じることに終わるのではなく、そこから動物の細部について、その変化について敏感になり、そこまで含めて受け止め、楽しんだり、心配りをする。感性の広がりを元に、感情的関わりが深まり、また多様な感情が生まれ、同時に、気づきが様々に出てくるだろう。

感性的に把握するとは、その動物そのもののとらえ方とともに、その動物が子どもの生活圏にあり、そしてその中で生きているものとしていつも気遣いを受けているということでもある。視野にありつつ、でも見えていないとか、単なる置物どころか、邪魔もの扱いされていることはいくらでも学校で見聞きする。そうではなく、子どもが通りすがりにちょっとでも動物の小屋をのぞくとか、登校途中で餌になる草を探すとか、そういう行動が成り立つことが肝腎なのである。

そういうことの上で、一般的な思いやりの態度とか行動をとらえることに意味が出てくる。思いやりや共感といった傾向を質問紙などでとらえることを行ったりするが、その評価が意味を持つには、その前に上記で述べてきた動物への関わりの変容があることが確認されねばならない。

### 3 命の教育の基本として

生物はいかにも生きているという感覚をもたらすものであり、また生き死ぬ存在であると同時に、種としての独自性がありつつ、その種類が驚くほど多様で、しかも、その中の個体差は微妙であることが特徴である。

命への出会いとは、生き生きとした様子を自分でなく、多くの相手に感じるところから始まる。自分が生きているのではない。まわりの親しい人はもちろん生きているが、話したことのない親しみを感じない人でも生きている。虫も魚も生きている。生きているという実感を持つことが出来、その上で、その生きている様子への好意を感じられるかどうか。ゴキブリに嫌悪感を感じるのは仕方がないとしても、セミにもアリにも嫌な気持ちを覚え、つぶしたくなるようでは、命の

教育にとうていつながらない。

生物の多様性に気づくようにする。生物には実際に様々なものがある。その多様性が生物の特徴であるとともに、多様性を保持することが生命を大事にすることの基本にある。ペンギンのように人に似ているとか、パンダのように愛らしいとか、そういう動物は好まれる。しかし、命とはすべての生物が持つ特徴である。愛らしいのであろうと、そうでなかろうと、尊重してほしいのである。むしろ、様々な形や習性の生物がいること自体に関心を持ってほしい。各々の生物のそれしさに意味がある。生物の不思議さと魅力もその多様性にあるのだろう。

生命の生きる場は多種多様であることが分かる。生き物はその生きる場と切り離せない。それが「生態」ということの意味である。ペットの飼育のみに寄ると、そのことを忘れやすい。多少とも人間の生活と同一でない場で生息する動物の飼育が学校で意味が出てくる。命を生物の単体の働きとしてとらえると、生物を大事にすることが単に個々の生物に餌や水を与えるとか、死なせないという発想を出ない。だが、生物は生息地に生きていて、その場の保全があってこそ、多くの生き物が生きられるのである。また、生物とその生態との関連に目が向いて、生きることの背景の広がりへと理解も進む。

命あることは身体の活動・動きからなるのだから、その多様なあり方に出会うようにする。移動の仕方にも、歩く、跳ねる、走る、這う、飛ぶ、泳ぐ。また各々に独自の様々な動きがある。それは見るだけでなく、触ったり、迫ったりする中で感じ取れる。図鑑で見るような形は見分け方では大事だが、命という面で見ると、その生き生きした様子はいかにも生物らしい動き方にある。そして、その動物固有の動き方がある。植物でも風にそよぐ木の梢は単なるペンキで塗った絵とは異なる生きた感じをもたらす。動きに敏感になれるように、実際の動植物に身近で常日頃関わることが大事になる。また、触ることやにおいを感じること、細かい動きを追うこと、等々の関わりがあつてこそ、分かってくることである。

生まれ、成長し、衰え、死ぬ存在として、その過程を知る。それを実感する機会をいかに作るか。無駄な死ではなく、惜しまれるまた意義ある死に出会えるにはどうしたらよいかが肝腎である。愛着を感じ、慈しんでいるからこそ、その生物の死に対して、残念だと思い、悲しみを感じる。愛着とはその個体への他に置き換えがたい愛情の気持ちである。他に置き換えられないからこそ、死んだら買い換えればよいというわけにいかない。命とはそういう代替可能でないものを指すのである。

大事にし、またその個体としての存在に関わることの中で死に出会うことが肝腎である。その条